

平成17年度 [第17-K1510-01号]  
二級河川巴川（麻機遊水地）河川調査に伴う風土・史跡調査業務委託

## 報 告 書

平成18年3月

静岡県静岡土木事務所

## 目 次

1	調査の目的	1
2	調査内容	2
3	調査体系	2
4	調 査	4
4-1	調査概要	4
4-2	麻機遊水地の地理的な理解	11
1)	地形・地質の資料整理	11
2)	最近の調査から言えること	19
4-3	麻機遊水地周辺と人の関わり	23
1)	居住環境の資料整理	23
4-4	麻機遊水地の風土・史跡	40
1)	風土の資料整理	40

(7) 年中行事

【麻機地区】

①初山

(1月 4日)

モヤ取りをする山へ出掛けて行って、立木へ御幣をゆわえつけ、洗米やモチをあげて拝む。山仕事でけがをしないようにという行事。だいたい正月一カ月ぐらいはモヤ取りの仕事で過ぎたが、それで一年分の燃料は確保できたという。

②七草

(1月 7日)

大神宮さん、あるいは荒神さんの下で、すりばちの上にまな板をのせ、その上で、大根・人参・ごぼう・せり・よめな・なずななどの七種の野菜・野草をきぎむ。

これをきぎむ時の歌を、杉山かつさん(明治26年生まれ)は、次のように歌ってくれた。

「ななくさなずな とうどのとりが わたらぬさきに ななくさあつめて ストントン」

きざんだ七草は塩あじをつけた七草がゆに煮て、まず神さんにあげ、残りを家族で分けて食べるという。

③田打ち

(1月11日)

年の始めの田を打つ行事であり、鍬で稲株を三株ないし五株をほり起こし、その起こした土の上に御幣を付けたススキを立て、焼いた餅と、お洗米をあげて本年の豊作を、天神地祇に祈った。

田打ちをする人はその家の当主であり、打つ田は本人の苗代にする田である。日の出前東に向かって礼拝拍手した。またその日に小作人は、地主に本年の小作権利を願いにあいさつに行った。

これに対し地主は、出来るかぎり御馳走した。

現在でも行われている。

④ドンドヤキ

(1月14日)

家々の正月のおかざりを集めて焼く。

この時書ぞめを火に入れて、灰が高くあがれば手が上がるといい、このオキでたばこを吸うと、歯が悪くならないという。青竹の先を二つに割って、そこに大神宮さんにあげたヒシモチをはさみ、割った竹の頭にダイダイをさして、このオキで焼く。モチは家族で分けて食べ、ダイダイをさした竹は、家の門口に立てておくと魔よけになるという。

⑤マユ玉

(1月15日)

前の晩にトリコナをねってマユ玉を作っておき、15日の朝、アズキ粥に煮る。何の木でも実のなる木に「なるかならないか ならなければぶち切るぞ」と言って、ナタで木にキズをつけ、そのキズ口にこのアズキ粥をかける。このアズキ粥を食べる時には、熱くても決して息を吹きかけてはいけない。

養蚕がにげるからである。

⑥廿日正月

(1月20日)

一日仕事を休む。

⑦初午

(2月最初の午の日)

二月の伏見稻荷(地の神)の前に「正一位稻荷大明神」と書いた赤い旗をたてる。

旗は幅15cm、長さ30cmほど。あわせて塩・洗米などをあげ、二礼、二拍手、一拝。

⑧節分  
(立春の前夜)

棹の先に目カゴをさかさにつけ、ヒイラギ・香花を添えたものを門口へ立てる。いったマメを一升マスに入れ、大神宮さんにあげた後、夕方になってからこれを主人が播く。

まず、部屋ごとに福は内を三唱して一回まき、最後に外に向かって鬼は外を三唱してまく。残した豆は小さな三方に入れて大神宮さんにあげておき、初カミナリが鳴った時に食べる。無病息災のためであり、同時に、かけごとにも強くなるという。

昭和10年頃までは、子どもたちが手に手に袋をもち家々を廻って各家々に上がり、車座に座りその家の主人公が車座になった中心へ、

豆・アラレ・菓子・みかん等を投げ入れると、子供達は両手で自分の股の間に競ってカキ込んで自分の分け前とする。これが子供たちの大きな楽しみであったという。

⑨山の神さん  
(2月8日)

**山の仕事はしない。**この日、山仕事をすると、どこからともなく矢がとんで来てあたるという。山に向かって拝礼し、夜は、お当夜のように寄合って、一杯やりながら過ごす。

⑩おひなさま  
(3月3日)

古くは天神さまをかざっていたものだが、やがて、男の子には天神さま、女の子にはお内裏さまをというふうに分化した。かざっている間は、毎日朝夕、家で作るものをあげた。古くなった人形は、しまう日にお宮に持って行って庭の隅に置き、お宮では旗をたてる日にこれを焼いた。

⑪農あがり  
(6月20日頃)

田植が終わったころの日を見はからって農あがりとする。

その時、お宮では旗をたて、お宮を開いてここで世間ばなしなどしながら、ゆっくりと杯を交す。骨休みである。旗は五日間ほど立てている。

田植のあと、苗を一束残しておいて、荒神さんにあげておく。

⑫お盆  
(7月31日)

田の草とりやお茶の関係から、7月31日が迎え火となる。お墓の前で古い花立を燃し、この火を線香かこえ松にうつして自宅にもち帰り迎え火をたく。仏壇の前のかぎりには、まず、5月に出た女竹の新竹を扉の上にわたし、これに栗・みかん・トウモロコシ・里芋・生姜・あわのような穀類・ホオズキなど七種類をかけ渡す。仏壇の前に机を出し、その上に、マコモを糸でつづったゴザを敷いて、ここに位牌をならべ、その前に本膳にかわらけをのせて、ボタモチなどをあげる。ナスで作ったウシとキュウリのウマが並ぶ。

その前か、あるいは机の下に、米やナスのきざんだものを里芋の葉にのせて置く。机の下に、別に一人分の膳を置く場合もある。8月3日の朝が送り火である。この日、朝食後、仏さんにあげた花やごちそうを、そっくりマコモのゴザに包んで、地域ごとに決まった場所に行き、これをひろげ線香をあげて拝む。

盆のあいだ、朝晩仏さんにあげるものが決まっているという。谷久保の後藤茂さんのお宅では

初日夕飯時、米の粉をねってダンゴにし、ゆでた「迎えダンゴ」をあげる。

二日目の朝は御飯と味噌汁。味噌汁は、味噌を水でといたものに、ナスやキュウリのきざんだ物を入れる。煮ない。昼、ボタモチをあ

げ、夜、御飯とおかずをあげる。

三日目の朝は御飯と味噌汁。昼、そうめん。夜は御飯とおかず。

四日目の朝はカボチャを煮たものと「送りダンゴ」。迎えの日に、家族で塩魚の焼いたものを食べると餓鬼仏になめられないといい、送りの時、なすの牛やキュウリの馬で家族全部のからだをなでると、病気をもっていってくれるともいう。

⑬十五夜

(旧暦 8 月 15 日)

三方にへそモチをのせて、縁側に出し、月に供える。

ハギとススキを花びんに挿して、これを傍に置く。子供たちにとっては、他家のへそモチをこっそり取りに行くのが楽しみで、棒の先に曲げくぎをつけたのを持って、縁側をねらった。あんのある餅を手に入れた時は、とてもうれしいものだったと年配の人たちは懐かしがる。へそモチは米を洗って干したあと石臼でひき、その米の粉をねって、のして（あんを入れ）、へそをつけてセイロでむしたものをいう。

⑭お日待ち

(10 月 16・17 日)

16日の晩から宵まつりが始まり、宮当番が神社の扉を開いてお参りが行われる。戦前には、この時にあわせて小学校では運動会や作物の品評会・俳句・和歌・書道・美術などの作品展が開かれた。

これらの展示物で、各教室がうまったという。これが終わると、いよいよ稲刈が始まるのである。

⑮イモウデ

(10 月下旬か 11 月初め)

皮のままの里芋やクリをゆで、十五夜の時と同じように、月に供える。12 月 15 日頃、稲が片付き、清水の秋葉山に代参が送られる。

そして、正月の支度がすすめられる。モチワラを使って、大神宮さんの大根じめ、オイベスさん（えびす）のごぼうじめ。荒神さんには宝船をかたどったしめなわを用意する。納屋・便所など、それに車・自転車・井戸などには輪かぎりが必要である。臼にもしめをまわす。鰯にはひし餅をつけて、輪かぎりをつける。このひしもち は、田打ちの時とドンド焼の時に使われる。

(資料：麻機誌、地元ヒアリング)

<例祭>

麻機には昔から十社あまりの村社と数社の無格社がある。

村社は農上がり（6 月）とお日待（10 月）の 2 回例祭を行って今日に至っている。

村ではみこしやダシを出した例はない。ただ、例祭日には氏子が集って社掌を招き祭事を行うのみでお日待と称して、昔は親戚縁者を招待して御馳走をいただく風習である。

これは今日も続いているが、昔日のそれほどでもないようである。このほか正月にはメ縄をはり神棚を飾って祝ったものであるがこれとても簡略になったことは事実である。

(資料：麻機誌、地元ヒアリング)

## 【千代田地区】

山家と田所では伝承度やその内容に違いがある。山家は伝承度がきわめて高く、しかも、県東部ないし山地の民俗を色濃く残している。田所は稀薄になっている。山地と平野とでは生活様式も異なり、その違いを如実に反映している。

### ① 歳暮行事と正月準備

「ススハライ（煤払）」 歳暮をセツキ（節季）といい、師走の二十二、三日頃から家ごとにススハライをする。ニガコダケ（苦竹）をもって帚を作り、神棚から掃き始める。

大神宮の詞はじめ神々の詞をおろして丁寧<sup>ていねい</sup>に掃く。神棚の次は天井を払い、屋内の大掃除をするので一日がかりである。煤・箒等共に山や屋敷の隅に捨て、当夜は屋内の神仏にゴゼン（御膳）を進げる。当今は次第に日が繰り上げられる傾向にある。

「餅 搗<sup>つき</sup>」

九日は日が悪い<sup>くんち</sup>」または「九（苦）餅」といって29日の餅搗を忌み、28日か30日に餅搗をする。最初に搗いた餅からオソナエを取る。なお、田所では申<sup>さる</sup>の日の餅搗は火事を起こすといつて忌み、山家では丑・午の日を忌む。

「松迎え」

30日に山から迎える。松・榊（榊が少ないのでコウバナを代用する所が多い）とお飾用のウラジロ・ユズリッパを迎える。

ただし、市街地では店から購入する。

「年 飾」

三十日または大晦日に年飾をする。門松は門口に杭を立て、これに松竹梅を結びつける。ただし、門松を立てる家は稀で、伝統的な門松はほとんどみつけれない。大きい家などでは銀行やデパートの様式になっている。標縄はトマグチの上部敷居の所に張る。

タレ（紙垂<sup>しで</sup>）などを適当に挿み、中央に橙・ウラジロ・榊の葉・ユズリッパを挿む。屋内第一の神棚である大神宮さまの標飾もほぼ同様にする所とゴンボジメ（午傍標）にする所とがある。荒神はダイコジメ（大根標）を用い、これを船に見立て、入船とて、元の方を艦、末を舳先として、奥の方に向けて吊る。榊を花挿に活ける。エベス棚はゴンボジメ、その他、床の間、仏壇・水神・ジノカミ・農具・付属建物・墓などへは輪飾をする。

歳神棚をヒロマに架設する。天井から縄を垂らして棚板を乗せる。お飾は標縄またはゴンボジメとする。ゴンボジメの場合は、中央にシデ・橙・ウラジロ・ユズリッパを挿む。

床の間には大きな鏡餅を供え、その他の神仏はオソナエ（供え餅）を進げる。歳神棚はまちまちで、年玉とて鏡餅またはオソナエ、あるいは菱餅の上に丸餅を乗せる所もある。数も一組とする所、家族員数と等しくする所などがある。

餅のほか神酒・串柿・するめ・ごまめなどを供える。

正月の餅を搗き終わると、庭に菴<sup>むしろ</sup>を敷いて臼を伏せる。その中に榊またはお盆に新米を盛り、丸餅を乗せたものを入れる。臼には標縄を巻くか輪飾を供えるかする。山家では農具から蓑笠・ショイコまで取集め、臼と共にまつる。田所では臼とは別に農具に餅を結えてまつる。

「墓参り」

セッキに墓掃除を済ませておき、大歳の日<sup>おとし</sup>にオソナエ・輪飾を持参してお墓を拝む。ミソカバナと称してコウバナを花立に活け、線香をあげる。

「大 歳」 大晦日の諸用を早く済ませ、一同風呂にはいって、普段よりは早目に夕食をとる。一般に夜ふかしの習俗はなく、夕食の際に年越しソバを食べる。かつてミソカッパライとて夜の10時頃に空に向けて鉄砲を撃つ習慣が山家にはあった。ユリで大火を焚いたりする伝承は聞かれない。

## ②大正月の行事

「歳 神」 若水汲みの習俗は聞かれない。元日から三日にかけていわゆる三箇日は一家の主人たる男衆が早起きして雑煮を作って神仏に供え、家族に食べさせる。

「初 詣」 元旦の早朝または雑煮をいただいてから産土神社（氏神）に宮参りをする。ムラによっては当朝戸主たちが神社に参集して歳旦祭を執り行い、新年会を催す。

「仕事始め」 元日は家々で正月を祝い、二日から年始廻りをする。三日不浄目についてはとやかくいわない。一般農家にとっては、四日から七日にかけての初山、十二日の田打（講）が仕事始めとなる。

「初 山」 4日から7日にかけて一般農家では茶バラやミカン畑、山仕事をする人は山へでかけ初山の行事をする。萱または女竹・アクシバなど、その場にあるものを三本切り取り、畑の上方とか木の株を臨時の祭場として立て、オソナエを包んでいった紙を手でさばいてタレを作り、それに取付ける。洗米・塩などを撒いて祭場を清めてからオソナエを供え、東方または恵方を向いて拝み、仕事が安全に出来るように祈る。なお、八日は山止めなので遅くも七日には済ませる。

「七 草」 6日の宵または7日の朝に七草を刻む。七草の内容はハハコ（はこべ）・ナナクサ（なずな）・セリ・サトイモ・ニンジン・ゴンボウ・ダイコ・京菜の類で、このうち数種を用いる。まな板の上で包丁をもって叩くか、鍋の蓋の上で、シヤモジを両手にもって叩くかする。この際唱え言をする。

「七草ナズナ 唐土の鳥が 日本の国へ 渡らぬ先に 七草叩いてストントン」

または、

「七草ナズナ 唐土の鳥が 日本の国へ 渡らぬ先に アワひっ  
ちゃバタバタ クソひっちゃバタバタ」

7日の朝、七草粥を炊いて屋内の神仏に供え、家族も共に食する。

「臼起こし」 臼伏せ同様、定まった民俗語彙はなく、臼をあける、起こすなどといい、十一日早朝に起こして、なかの餅の一つはドンドヤキ用にとっておき、米は一部を同朝の田打（講）の洗米として用い、あとはその晩ご飯に炊いてお初を屋内の神仏に供えるか、小正月の粥に用いるとかする。起こしたあと、空臼を三回抱く真似をする。なお、作占についての伝承は聞かれない。

「田打（講）」 11日朝一家の主がコメと餅とをもって、屋敷近くの自家の田園へ行き、鍬をもって一鍬または二鍬ずつ三箇所起こして、萱または竹を三本立て、オソナエの下に敷いた紙を手で裁ってタレを作り、これに結びつける。家によっては雄松・雌松をこれに添えて立てる。起こした土の上に紙を敷いて小さく割った餅を供え、コメを撒い

て、日の出を拝む。このときのコメは臼のなかに入れておいたものを用いる。また、餅は神棚のオソナエ・臼のなかの餅・農具に縛りつけた餅など地域や家によってまちまちである。

神棚でも大神宮の神棚とする家や歳神棚の餅とする家があり、焼いて供える所もある。それらの餅の一部を欠いていく。その餅を鳥が早くつえばめば当年の稔りがよく、<sup>かび</sup>黴の生えるまであるのをうまくないとした。

「田打（講）」 おもに苗代田でし、大抵は家長一人でこの行事を営むが、家によっては農耕に携わる家族がみな出て拝む。

かつてこの日に小作人が地主の家を訪れ、借地の更新をする慣習があった。地主家では小作人に酒肴を供してもてなし、小作継続の承認を与えた。

「蔵開き・鏡開き」 大歳の日から蔵の戸を閉ざし、11日に初めて開ける。また、この日は床の間の鏡餅をさげて汁粉などにして食する。屋内の神仏のオソナエもすべてこの日にさげる。

### ③小正月の行事

「ワカショウガツ（若正月）」 小正月をワカショウガツといい、14日朝に若餅を抱いて屋内の神仏に供える。また「ヨメッコの正月」ともいい、嫁たちが十四日に在所に里帰りする。

「ドンドヤキ」 マツオサメとて6日におさめた門松やお飾りの類を村落ごとまたは組ごとに子どもたちが集めてきて、田園とか河原にオンベを立て、13日朝または14日夕にドンドヤキをした。

川合新田では、7日にお飾りをさげるので子どもたちがその日のうちに組々で集める。その時、オンベコンベをもち歩いて銭をもらう。

オンベコンベは適当な竹筒の先に割目を入れ、それにお飾りのタレを差挟んだもので、これを一人にもたせ、「オンベコンベの銭おくれ」といって各戸を廻る。集まったお金で色紙を買い、青年の指導でお宮の境内にオンベを作り、夜間、他の組の者に倒されないように監視し、13日の朝ドンドヤキをした。

南沼上では11日に子どもたちが、お飾りを集めて河原にオンベを立てる。川合新田と同じようにオンベコンベを作り、詞章を唱しながらこれを担ぎ歩いて、銭をもらう。

「今年の年は世のよい年で 黄金の枡で金を計り申す 婿取り・嫁取り だあーせ だあーせ ださない者はしわんぼ」

しわんぼは、柿の種 柿の種の腐ったのこの一年間に婿取・嫁取のあった家から扇子をもらう。また、各戸から集めた銭で、ダルマ・オカメの面・色紙・麻苧などを買ってオンベを作り、十四日の晩にドンドヤキをする。

北沼上ではムラごとに子どもたちがお飾りを集め、前年に婿取り・嫁取りのあった家から扇子、各戸から「ドンドヤキの金」として銭をもらう。集まった銭でダルマ・オカメの面・色紙などを買い、求め、青年の指導でオンベを揮えて、14日の夕にドンドヤキをした。

オンベの形は南沼上の上のものが基本形をあらわしている。

「ダイノコ・ショウノコ」 山家の行事で、15日に山からダイノコの木とて<sup>ぬるで</sup>白膠木を伐ってきて削掛作りをする。

「二十日正月」 この日は山へ出ずに家で休む。組ごとに山の講の講中があり、トウヤに寄って共同飲食をする。この日山にはいればバチ（罰）があたるという。おもに山家の行事となっている。田所では雑煮なりゴゼンな

りを屋内の神仏に供え、節句をした。

- 「萬 歳」 正月中に萬歳・神楽が祝福にやってきた。旧千代田村を持場としたのは碧南地方の三河萬歳。  
神楽も正月によく訪れた。柳新田や丸子の赤目ヶ谷方面からやってきたものらしい。これには屋内を清めてもらった。

#### ④ 春・夏の行事

- 「節 分」 オニオドシ（鬼威）とて長い竹竿の先に目籠を掲げ、山家では竿の先端に<sup>ひいらぎ</sup>柊とコウバナの枝を立て、田所では目籠のなかに入れて吊し、ホンヤの外に立てる。

一方、山家ではヤキカガシを作って豆炒りをする。

- 「初 午」 二月初午の日に稲荷さまの祭をする。青・黄・赤・白と貼り次いだ紙または布の<sup>のぼりばた</sup>幟旗に「正一位稲荷大明神」と書いて社前に立て、赤飯を供える。

- 「春彼岸」 「入りダンゴに中日牡丹餅」または「中日牡丹餅、明けダンゴ」といってダンゴや牡丹餅を作ってホトケさんに進げる。  
中日はみな仕事を休んで実家やホンヤなど血の濃い親類のホトケさんにお参りし、線香を立てる。この期間中に憎が檀家を訪れて経をあげる。明けの日はばあさんたちが寺に寄って念仏をあげる。

- 「ヒナ節供」 4月3日にするならわしである。白餅・赤餅、それに新しい蓬を摘んで草餅を抱き、菱餅を雛段に白酒などと一緒に供える。桃の花を活け、長子の初節供には嫁（婿）の在所や血の濃い親類から武者人形や雛人形が贈られる。お返しに菱餅を三枚ないし五枚贈る。

- 「四月八日」 お釈迦さんの日で、寺で甘茶の接待をする。これをビンに入れてもらい家族にも飲ませる。

- 「八十八夜」 新茶を摘み、煎じてホトケさんにあげ、中気の薬とて家族一同で飲む。昔は一煎じ分だけ摘んだが、現在は新茶摘みの最盛期である。田所では靱蒔をする。

- 「カシワ節供」 端午の節供をいい、宵の日に蓬・菖蒲で屋根を葺く。  
山家では主に、三本ずつを一組として軒先に葺き、田所では主に束ねて屋根に放りあげる。また、蓬・菖蒲を風呂に入れて菖蒲湯にはいる。

- 「ノアガリ」 6月末から7月朔日にかけて村落ごとにイチニチゼック（一日節供）をする。

#### ⑤ 盆行事

- 「七 夕」 田所辺では7月7日、山家辺では8月7日に七夕をした。  
七夕飾は数日間立てたあと、虫除けとて畑にもって行って立てる。則沢では盆の間中飾って送り盆のときに川へ流す。

- 「盆」 旧千代田村域の盆は、新暦盆・八月朔日盆・月遅れ盆と暦日が区々としている。千代田町以西は新暦盆、以東は朔日盆、山家は月遅れとなっている。北沼上も戦後二、三十年間朔日盆を行っていたが、近年

月遅れに復した。

七日盆から盆にかけて寺々でお施餓鬼をする。これには檀家の人々が参集して餓鬼を供養する。盆は13日から16日までの4日間となっている。ただし、朔日盆の所は、7月31日から8月2日までの3日間。

#### ⑥秋冬の行事

- 「八 朔」 陰暦8月朔日をいい、小豆飯を炊いて屋内の神仏に供える。  
以後、日中の労働が短縮され、かわりにヨナベ仕事が増えられる。
- 「八月十五夜」 月見とて月を祭る。エンガワに台を据えてヘソモチを供え萱の穂や萩を花瓶に活けて飾る。ヘソモチをヤマオシキに盛り萱の箸を添える。  
夜にはいって子どもたちがこれを盗みにくる。
- 「秋彼岸」 春彼岸同様にする。中日にお墓参りをする。
- 「十三夜」 陰暦9月13日の夜に、あとの月見とて月を祭る。サトイモ・サツマイモ・クリ・枝豆等を茹でてエンガワの台上に供え、萱の穂と萩を花瓶に活けて飾る。供え物をヤマオシキに盛り、箸を添えることは十五夜同様である。この時分はなるとミカンや柿・梨の実も大きくなるので、他の野菜と共に供える。
- 「エベス講」 陰暦神無月20日にエベス・大黒を祭る。新旧の両度に祭る所もある。ゴゼンと尾頭付、二股大根を供える。もっとも沓谷のように二股大根では形が悪いので、わざわざ普通の大根を供える所もある。  
横田の西宮神社からご縁起を買ってきてあげる。
- 「亥の子」 陰暦10月または11月の亥の日にイノコボタとて牡丹餅を作り屋内の神仏に供える。古くは芋牡丹だった。
- 「七五三」 11月15日に産土神社にお参りし、親類や近隣に赤飯を配る。長男と長女については、嫁（婿）の在所や血の濃い親類から衣服などが贈られる。
- 「冬 至」 現在、師走朔日を特に祝う習俗はなく師走の行事は冬至があるのみである。冬至カボチャといって当日はカボチャを煮て食する習わしである。冬至カボチャをいただくと中風にならぬといわれている。

(資料：千代田誌)

## (8) 食生活

### 【麻機地区の食生活】

#### ①昭和以前の食生活

江戸末期における村の人々の食生活は次のような食生活であった。

1. 朝 味噌汁1杯（味噌各自自製）、温飯
1. 昼 冷飯、香のもの（沢庵）おかずなし
1. 晩 麦飯、極めて軽いおかず（無き時は香由もの）

明治大正当時、魚売りは天びん棒で荷をかついで2、3日おきに行商していた。これを月何度か買ったが当時「もったいない」という語が常套語で、節約とは食物に限らず栄養不良になるようなことが実意語であった。だから部落中食料節約のために、栄養不良だったと言ってよい。軍隊では栄養第一と考えカロリーを大切にしていたので、入隊すれば、2、3貫体重が増すのが常であった。

食料が変化向上したのは、終戦後小学校で給食が始まってからである。小学校で給食をはじめたのは昭和22年からである。これによって、バターをとること牛乳を飲むこと、肉を食うことを覚え食生活に新風をもたらし、子どもの体位が非常に向上したことは事実である。

家でご馳走の日

元日（雑煮）

現在の正月の雑煮は、鯉節のだしで、具はさといも、だいこん、京菜、餅は四角。

小正月（雑煮）

寒あけ（豆まき） 三月三日 ひなの節句

彼岸 中日（ぼたもち 明けだんご）

茶振舞（茶節句） 植上げ（田植完了）

野上り日待ちの日

盆（池ヶ谷を除き八日一日）

土用入 アズキ（丑の日うなぎ多し）

秋彼岸 お月見（だんごぬすみ）

秋お日待ち 亥の子 ぼたもち

年越しそば

粗食と過労が江戸時代からの百姓の生活であったが、これが改良され生活様式が一変したのは終戦、それも三十年後に顕著になったものである。

6月から8月中は夕茶と称し、午後3時頃に更に一食したが今は概ね止めたようである。

#### ②昭和の食生活

##### i 食べたものの思い出

みかん栽培が盛んな昭和40年頃までは、子供の頃食べた物として、みかんの摘果作業を手伝いに行った時など、みかんを食べたりしたが冬はみかんを焼いて食べた。

山菜は、現在はあまり食べない、と言うより食べられる野草がわからない。かつては、葉ものや芽などいろいろな種類を食べた。昔の人たちは、どれが食べられる物か、たくさん知っていたことにもよる。

特に、ハスの実はおいしかった。生で食べた。

## ii 家で作っていた調味料

たいていの調味料は自前でつくり、味噌はどこの家でも作った。

クロ砂糖は、さとうきびを畑で作って、荷車で浜（幼いときに車に乗せてつれて行ってもらったので場所がどこだったのかわからない）に持って行って、そこで絞って作った。

## iii 猟

父親も祖父も鉄砲をやり、ヤマドリ、ハト、ウヅラ、コジュケイなど撃ってきた。

おいしかったのはキジとウヅラだった。穀物をエサにする鳥は味が良かった。

シカやウサギも獲ってきた。皮を剥いで敷物や椅子にかけて使った。

趣味の狩猟だったから、家で食べたり皮を使うだけで、売り物にはしていなかった。

イノシシ猟は、10人くらいで組を作って、イノシシの通り道のあるあちの尾根こっちの谷と持ち場を決め、自分のところにイノシシが来たらその人が撃った。

杉山さんは子供の頃イノシシ撃ちに付いて行った。

料理前には、皮を剥ぎ、肉を取り出すことは、どこの家でもできた。

## iv レンコン

レンコンは9月くらいからの時期にはよく食べた。

煮るのが一番多かったが、酢にしたり、白和えも作った。

すり身にしてハンバーグにするようなことは最近のこと。

（資料：麻機誌、地元ヒアリング）

## 【千代田地区食事と食習】

### ①食事と食物

#### i 食事の回数 農繁期と農閑期とでは回数が異なる。

山家での農繁期はオチャドキといい、かつては一番茶（新茶）から四番茶（シュウトバン）まであったので五月初めから十月初めにおよんだ。田所の農繁期は田植と秋で、暦の上では五月中頃から六月中頃までと九月末から十二月初めにおよんだ。そのうちもっとも忙しかったのは一番茶のオチャドキとタウエドキでアサメシ、ヒルメシ・ヨウジャ・ヨウメシと日に四回の食事をした。夏期の農耕期間はほぼこれに準じて食事をした。八朔を過ぎるとヨウジャがなくなって日に三回の食事に戻る。「八朔やヨウジャ取られてヨナベかな」の狂句がある通り、旧暦八月朔日以降日が短くなるのと作業の都合とでヨナベをするようになる。なお、脱穀と粳磨は夜間おこなったので、秋の期間はヤセコとて夜食をとった。

#### ii 食物の構成

山家・田所共に主食はムギとコメで、白米飯というのは盆・正月とオヒマチ・セックばかりで、普段は常時ムギとコメを混合して食した。これをバクメシまたはムギメシといい、カテメシとは区別した。糎（「かて」とは米に混ぜ合わせるもの）はサツマイモ・サトイモ・フトボシの類であった。食事を家でする限りお汁はつきもので、野菜を具とする味噌汁である。ご飯をゴゼンと称するが、朝飯にはゴゼンを出来るだけ少なくとるために、「メシのタセ（ツコ）」と称して、前の晩に煮上げたイモ（サツマイモ・サトイモ）の塩茹でを火にあぶって食し、ゴゼンの補いとした。一番茶のオチャドキやタウエドキで、住家から離れた所で作業をする場合は昼の弁当を携帯する。木曾メンパ・井川メンパなどという曲物（くりもの）の容器にバクメシをつめ、おかずは梅干し・生味噌などありあわせのもので間に合わせる。田植の日のおかずは、大根キリボシと油揚げを煮染めたものと決まっていた。食物がどうのこうのよりも田植の目は忙しくてろくに食事をする暇もなかった。

なお、野外で弁当をつかうときは、萱・ハシギの幹を箸として利用する。ただし、「十五夜さんが過ぎぬうちはお月さんに悪い」といって八月十五夜前は萱を用いなかった。使い終わったあとはそのまま捨てる。折って投げ捨てた際、もし草や木にひっかかったりすれば、明日雨になるという。

多忙な時にはヨウジャは粗略であったが、ゆとりのあるときにはキンツパ・ベッタラヤキなどの菓子に近い食物を作った。

ヨウメシはいわば一日のなかの正餐である。バクメシの場合は魚や漬物などおかずを多くする。それでなければ粉食にするか粉食の類をメシのタセ（ツコ）にした。

脱穀と粳磨は重労働なので腹がすく。そこでヤセコとして油揚げ入りのゴモクメシやヨウメシの残り、イモ茹での類を食した。

### iii 食物の内容

普通バクメシはコメ四分に対してムギ六分の割合で炊きあげる。ムギは丸のままを食した。バクメシを炊くには前の晩のうちにあらかじめムギを煮しておく。煮上げのことを「え（笑）ます」という。えましてイトリ（箭）にあげておいて、翌朝コメの煮立ったときに加える。

カテメシの糰もバクメシに加えるのである。イモ類は少し塩を加える。味わいは個人の嗜好の問題ではあるけれども、サツマイモメシはあまくてうまくなかったといわれる。フトボシは芋茎を干したもので、これを微温湯でもどし、醤油で薫染めてから加える。サトイモメシ同様うまかったといわれる。

ゾウスイを沓谷辺では毎晩のように食したという。味噌汁に小麦粉をねって手でちぎって入れる。スイトンは醤油味で、カボチャ・デイコ・ジャガイモを煮込んだ汁のなかに小麦粉をねって塊にして入れる。これらがあればおかずはいらないくらいであるという。

うどん・ソバは粉食の代表で、粉を挽くには石臼を用いた。

麺類のだしはハヤ（鮠）味噌を用いた。ハヤを焼いて味噌と共に練ったものである。ソバモチはサツマイモを終に入れて蒸かしたものである。

ベッタラヤキは、油を引いた鍋に小麦粉を水で溶いて入れて焼き上げたものである。調味料をつけて食する。中に餡を入れて焼けばキンツパになる。イモの切干しは蒸かしたサツマイモを切って干しあげたもの。イモノコというのはサツマイモを蒸かして臼で搗きつぶし、これを餅のように竹篋で切ってスタレの上に並べて干したものである。暖かいときに表面に白い粉をふく。紙袋に入れたのを吠に詰め、固く縛って保存する。これをオチャドキにヨウジャとして食する。

魚は上等の食物であった。山家へは清水から峠越しで、田所へは巴川に沿って魚売りがやってきた。イワシは生物、サバは塩物と決まっていた。そのほか、イカ・ニシン・イルカがおもなものである。

ニボシ・ワカメは榛原郡の相良方面から売りにきた。歳神さまに塩鱒・塩鮭を掛けるのがなよりの縁起物であった。

野良仕事の弁当のおかずは漬物と味噌をもっぱら用いた。なかでもタクアンとオタマカブの塩漬と塩干しを多用した。大量に漬けて年中のおかずにした。

山家では初夏に真竹（まだけ）・淡竹（はちく）などの筍（たけのこ）がとれる。これはアラメなどととも煮て食する。山菜ではウド・ワラビ・ゼンマイ・フキがある。ウドは生のまま刻んで酢味噌に和えるか、火で焼いて味噌をつけるかして食する。ワラビはアク抜きをする。灰の煮汁に入れて茹で、そのまま刻んでお浸しにするかオツケの実とした。昔はゼンマイを採らなかったが、近年は採取するようになった。フキは一旦茹でてから醤油と砂糖で煮染める。畑の畔や土手などにノンビルが生える。これは汁の実とするほか、焼いて胡麻味噌で和える。独特の刺激的な臭いと味わいがある。これらは春か

ら初夏にかけての副食物である口秋から冬にかけてはヤマイモがある。郷土の人々はヤマイモには目がない。トロメシとてこれを磨りおろして飯にかけて食する。

#### iv ハレと年中行事の食物

祝言の献立は赤飯に豆腐汁とオヒラ、鯛の尾頭付、刺身となっている。それに煮豆やイモの煮付といったもので、これらは取り廻しする。オヒラはご馳走というとも必ず作る料理で、ゴンボ・ニンジン、レンコン・ヒリヨウズ（ガンモドキのこと）・コンブ・イモ（サトイモまたはジャガイモ）を煮染めたものである。

葬式の会葬者への食事は簡単なもので、白米飯に豆腐汁とオヒラ、それに煮豆とイモの煮付といった程度である。

次に年中行事の食物ないし特別食である。

まず、正月三が日は家長の料理でゾウニを食する。サトイモ・ダイコ・ニンジンの野菜と共に餅を煮込む。これは神仏にも進げる。三が日だけは白米飯で、オヒラや豆腐汁のほか、数の子や塩鱒または塩鮭の馳走を食する。

正目七日は七草粥。小正月にも餅をつき、小豆粥を炊く。馳走は餅を大正月に準ずる。

春彼岸の入りの日にはダンゴ、中日は牡丹餅とする。または中日牡丹餅、明けダンゴとするならわしもある。

雛節供を新暦四日三日に祝うならわしで、白餅・草餅・赤餅と色とりどりの菱餅を桃の花や白酒と共に供える。端午の節供には白餅を作って供える。

六月末から七月朔日にかけての村節供、ノアガリにも柏餅を作り、神仏や農具に供える。

お盆にはソーメンをよく食する。

八月十五夜はヘソ餅をお日さまに供え、九月十三夜にはサトイモ・サツマイモ・クリを茹でて供える。

十月中旬過ぎになると産土神のヒマチ（お日待）となる。新穀でもって餅を搗いて祝うならわしである。また、ゴモクズシなどを作る。

旧暦十月二十日は恵比寿講。おこわと尾頭付二対というのが定まった供え物である。また、十日または十一月の初亥の日にイモボタないし牡丹餅を作って屋内の神仏に供える。イモボタはイモ牡丹餅を縮めていったものである。

大歳には歳神棚を設え、塩鱒などの尾頭付や供え酌を進げる。当夜は年越しソバを食する。

ハレの食物のあらましは、子講・庚申講の食事も白米飯または茶飯（ちゃめし）に豆腐汁とオヒラ・オツボ（煮豆）・コウノモノなどといったところである。ただ、サトイモの収穫期に巡ってきた庚申講にはシンヤキとて、煮芋に味噌をつけて焼いて供え、講中にもふるまう。

（資料：千代田誌）

## (9) 麻機の沼のくらし

### ①川の浚渫作業

沼には十分な路もなく、谷久保と草場前から向こう側の日焼けや反高へ通ずるリヤカー一道が通じていたが、荷を積んで通ると沈下するので、部落民は夏になると沢尻の土砂をさらい、路づくりを行った。また、この沼地の排水の主力は七曲川で、巴川となって旧清水市へ流れ出ている。

ひと夏の雨で勾配の少ない川底は泥が数尺溜まるため、来年の田植前に部落民総出で川掘りを行った。女の方は土手の草を刈ったり、土手に上げられた土をならしたりするし、男はスコップまたは四本歯の万能鍬で高い土手上に泥土をすくいあげて、川の清掃をして雨期を迎えた。また、巴川は長尾川や吉田川の合流点に膨大な土砂が堆積されるために、そうした下流まで出向いて行って掘った。モッコをさし合いで高い土手までかつぎ上げる作業は随分と苦しい土方だった。男は十六歳になると課役<sup>かやく</sup>の任を負わされた。

(資料：麻機誌)

### ②水郷のまぼろし

麻機沼に近い静岡市立観山中学校には船が備えてあると聞いた。

学校の敷地も周囲に比べてずいぶん高くなっている。もちろん洪水対策だ。かつて沼周辺の生活に船は欠かせなかった。

江戸時代中ごろの文書には、上ヶ土新田・川合新田・下足洗新田・南村の四か村には、<sup>さくば</sup>作場船すなわち日常の農作業に便う船が四十六艘あると記されている。戦後の写真にも小さな川船が写ったのがあるし、実際に船を扱った体験をもつ人もまだ大勢いる。

この地域の暮らしは水との戦いの連続であったが、他方ではその水をうまく生かして暮らしていた。

こうした環境に大規模に適応しているところとして有名なのが、茨城県の水郷である。静岡では都市化が進む中で沼や水路は邪魔者となったが、もし開発の方向が違っていたら、麻機沼周辺が静岡の水郷になっていたかも知れない。

今ではかつての広大な沼の姿を想像することはむずかしいほど周辺は変貌している。しかし、渡り鳥の貴重な飛来地になっているわずかな水面や、地元の年中行事のシバアゲという伝統漁法から、沼の環境の一端を辛うじて知ることができる。

(資料：静岡の文化71号 麻機沼の水のゆくえ)

### ③川周辺の昆虫・野鳥

夏の川辺はトンボの天国で、オニヤンマを初めギンヤンマ・ウチワヤンマからオハグロトンボ・ヒューキトンボ・糸トンボに至るまで何十種類の珍しいトンボが子供心を楽しませてくれた。一時、絶滅して一匹のトンボを捜すのに苦勞する程であったが、麻機遊水地ができ、数多くトンボを見ることができるようになった。餌のある所には自然に水鳥も多く、クイナ・<sup>ばん</sup>鵜・ヨシキリなどヨシ生えの中か真菰の高い所へ巣をかけて一日中鳴き暮らし、川千鳥が行ったり来たりして、時々急降下して水面にジャンプしては小魚をくわえて行く。

秋になると鴨が来る。オシドリも渡って来た。ウズラやチョウマ、雲雀から渡り鳥の殆どを見る事が出来たし、白鷺は殆ど一年中純白の羽根をひろげて、優美な姿を見せている。

最近では鴨が少しばかり渡って来ると十一月の狩猟解禁日の朝早く鴨の羽数より多いハンターの一斉射撃で壊滅してしまうし、耕地整理後は水鳥の殆どが絶滅してしまった。

かつて、徳川家康が將軍職を引いて駿府に隠居する頃には、この麻機沼へも狩猟に来ていた。駿府政事録の慶長16年8月26日の記録に、「府城の北浅畑において鉄砲を以て鴨二翼を撃たしめ給ふ云云」とある。

秋、沼の周辺の稲が実る頃、雀の大群が来襲して来るので、ガス鉄砲や空砲でおどすと、

沼の柳やヨシ生えの中へもぐり込み、騒々しい鳴声で雀のお祭りのようです。セキレイやら青い羽根をしたヒスイなども川の棒ぐいの上でじっと獲物をねらっていた。そうした静かな川へ子供たちは水泳をしたり、菱の実を取ってたべたりして遊んだ。

(資料：麻機誌、地元ヒアリング)

#### ④川の生物と魚取り

太平洋戦争以前頃までは、水の汚染も殆ど少なかったためか、川には一面水藻が生え、その藻の中に2cm程の小さいエビが無数に棲息していたし、フナ・モロコ・ハヤなどがぞろぞろ列をなしていた。夕暮などは、ぼらの集団が水面一杯にぱくぱく浮いてきた。そのほか鰻・なまずなどはよく釣れ、時折赤い金魚も泳いでいた。

また、7cmぐらいの手長エビも釣れました。水面にはメダカはもちろん、アメンボや、水スマシ等小さい生物や魚を捕えて喰うグロテスクなタガメ・タイコウチ・ゲンゴロウなどはじめ名を知らない水棲生物がいました。川底の泥をかき上げると、ドジョウに混ざってトンボの幼虫がたくさん出てきた。七曲りの下流あたりは砂泥で、そこにはンジミや烏貝が取れました。赤い腹をしたいモリなども這い廻っていた。人通りの少ない川添いを歩いて行くと、大きな泥亀の背中に子亀が乗っかって甲羅干しをしている姿がよく見られた。スッポンもバケツにはまってしまう程の大きな物も釣り上げられて、釣人達で随分賑やかな頃もあった。

村の人々は川へつなげて入江の様な所を造り、その中へ枯れた雑木を長いまま束ねたのを入れておいて、冬魚が集まって動けなくなっているのを入口に竹のスタレをして逃げない様にしておいて、雑木の寝ぐらを取除き、二間ぐらいの柄の付いた長い大きなジョレンでその中の泥をかき上げると泥と一緒に魚が一網打尽に取れる。その魚を川水で洗って近くに用意してある焚火に鉄鍋を掛け、油を入れてからあげにするか、みそ煮を作り酒の肴にちびりちびりと呑んで楽しむ。

この方法を「しまあげ」と言って、寒<sup>ふな</sup>鮎の味は天下一品である。

また、夏の土用には部落民二十数名ぐらいで川を50mないし100mぐらい堰き止めて、大きな桶を二人一組で持ち、四組ぐらいで水をかき出す。「よいしょ、よいしょ」の掛声により、半日ぐらいで底が出て来ると、一斉に泥の中に入って、手づかみか大きなタモですくい上げる。もちろんところどころスタレをして魚の流れて来るのを止めて、大きなモジリに追い込んでしまう。川の泥は首までもくろる所もあって、その泥をかき廻しているうちに苦しくなった鰻がのろのろと顔を出す。子供の腕ぐらいもある鰻がぞろぞろと掬い上げられる毎に「すげえナー」の歓声が上がる。柳の根元あたりにはたくさんの横穴があって、腕を入れると中から鮎の大物やら鰻の大物をひきずり出す。

戦後、谷久保部落で行ったかいぼりには、鰻だけでも七貫目と言う記録がある。

しまあげ漁の様子（平成4年2月 資料：「多自然型川づくり」への取り組み）



## ⑤川の風物

川底は泥が深いので大へん危険であった。谷久保沢尻から七曲川に出るまでは舟が荷を積んで通るために、現代の歩道橋のような橋がかけられていて、これをラッカン橋と言った。水辺の草も豊富で、青い花を付けた浮草など、一斉に咲くと見事でした。匂いのよい菖蒲や、蔓バラが密生していた。そうした夏草の蔭から「もうもう」と鳴く食用蛙の声は、牛の鳴声かとまちがうほど太い声で無気味だったが、その肉は美味だと言われている。

夕焼け空には、ツバメが群をなして飛び交い、暗くなるとコウモリがしきりに飛び廻った。また蓮田のあたりや沼から漆山あたりにかけて、赤い火の玉がころげて廻った。近くに采たかと思うとぱっと消えて、遠くの方でぽっと出たり、二つになったり三つになったりして、さまざまに変化した。村人たちは非常にこわがって、「コイツキ石がころげ出した」と言って早く雨戸を閉じてしまった。この火の玉も沼の耕地整理や漆山付近の開発が進むと、狐も居所を失い、メタンガスの自然発火もなくなった。

夏大雨が降ると、一面水没して、川岸の柳の木だけが首を出している。その柳の木へ青大将や山かかし、縞へびなどがいっぱいいた。餌の多い水辺は蛇の絶好の生棲地で、昔は大蛇を見た人もあったそうだ。一間ぐらいの蛇はぞろぞろ這い廻っていた。

沼の四季は変化に富んでいた。冬枯の沼はヨシの枯葉に西の風が吹きつけてかさかさとした無情の音を立てる。褐色に霜枯れた草も黒い土も荒涼としていてついでに。冷たい青空に高く高く凧が一つあがっているのも侘びしい。寒い冬をぬけて猫柳の芽がふくらみ、やがて賤機山に桜が咲く頃は、水の流れにもやさしさがよみがえり、雑草の新緑が一带を埋めつくす。煙雨に明ける田植頃は、ヨシキリやクイナが間近に鳴いて絵画のようでもある。

「藁屋一軒小雨に明けて鳴くクイナ」などの句も自然に出て来る。

やがて夏に入ると、一面の蓮田も円い大きな葉を十分ひろげて、その中から白とピンクの花が咲きそろい始める。美しいそして淋しい花である。住民はこの花を仏前に上げて、迎え火を焚いてきた。白い入道雲が湧きあがり、たちまち雲の峰が崩れると慈雨がやって来る。一瞬蓮の葉を叩く雨の音は夏の涼味を呼ぶ音であり、ふる里の雨の音でもある。

「蓮の葉を荒く叩きて来る雨の音もすがしき夏は来にけり」

この蓮田辺から眺める文珠の山は、私たち麻機の人々に多くの勇気と希望を湧かせてきました。そして多くの詩に文珠をうたい込ませた。熱い夏も去って行くと、川の土手などに赤い彼岸花が燃え、間もなく沼の周辺は黄金の波が打ち、裏山は密柑の黄にぬりつぶされる。沼の水腐の人々は良招こそ恵まれなかった代わりに、蜜柑栽培には絶好の山を与えられた。戦後の昭和三十年頃までは、新潟・山形・秋田・福島・北海道などから移動勤労班が応援に来て、賑やかな密柑切りの風景であった。

近年、山の中腹に農道が整備され、各園はモノラックの布設などにより、作業の形態を大きく変化させた。収穫が始まる頃は、秋気身にしみて、文珠の岳はいよいよ高く、名月素光を流して、八幡さまの森から響く豊年太鼓の音に胸ふくらませて親子つれだって家内安全を祈る。やがて沼のほとりは冬の気配がしのびより、ふる里の山は深い眠りにつくのである。

蓮田



(資料：麻機誌)

## ⑥明治の児童の遊び

男子 正月ーたこあげ

春 ーたこあげ・こま閑戯・めんこ・めじろとり・他 小鳥とり

夏 ー魚つり・水泳・どじょうたたき

秋 ー小鳥とり・メンコ・輪廻し

冬 ー氷上のねつき・鳥とり・こま廻し

年間を通して縄とび

女子 正月ーまりつき・カルタ

春夏秋冬ーおじゃみ（お手玉）・きしゃご・縄とび・人形遊び・風船遊び

（資料：麻機誌）

## ⑦服装について

徳川末期から大正の半頃までは、冬は頭に「ほうかむり」夏は「はちまき」姿で、これが労働や外出時に用いられ、特に変わった風はなかった。

男の服装は、地主が羽織を着用したが、大方は半纏を着ていた。羽織は儀式用であった。

明治 10 年頃から村長格の人は儀式用として山高帽を用いた。

女の服装もお祭り以外に、少しきれいにすれば「シャレモノ」として非難された。

この様相は第 1 次世界大戦末から昭和期にかけて少しずつ変化し、男の農衣は明治 10 年頃から七ツボタンの紺シャツ、紺のもも引に変わり、現在のような農耕服に変わったのは昭和 大戦時に軍服、国民服が流行してからである。

（資料：麻機誌）

## (10) 麻機の生活

### ①土地

明治維新となり徳川慶喜・家達は駿府故にはいった旧幕臣もこれについて来たが居宅なく近郊の民家へ分宿した。

武士崩れで威張った態度がぬけず「お泊りさん」という名称まで生れた。

16代を約束された家達（当時6才）が静岡藩主（70万石）となり後に廃藩置県発布と共に第一代静岡県令となった。

明治9年から数年間現在の土地台帳の源になる土地の測量が行われ各部落の有志がこれに当たった。

これによって、土地の台帳ができ新しい地租の基礎を作ったが明治初年頃までは、麻機地区は松平丹後守の領地で各字が即ち村で村長たる戸長があり名主があつて村方三帳を保管し土地のことから戸籍まで管理していた。

即ち松平丹後守領地（1万石）の内

東村 482石、北村 520石、羽高村 88石、有永村 427石、南村 489石、池が谷村 427石

### ②水との戦い

麻機水田面積は約250町（248ha）と言われている。このうち、百町歩余りは旧浅畑沼の地域で明治初年は所謂「いかり」と称して雨が降れば冠水した。

これが、麻機の宿命で俗に言う十年一作が文字通りで稲の収穫は不安定であった。

浅畑沼の開拓は元禄以来の懸案で、明治になってからは住民の命をかけた仕事であった。

谷久保の谷川権右衛門は南の関係者と巴川改良の大事業を自らの手で着手し刀折れ矢尽きて私財を消費しついに悶死する。

水害はほぼ毎年あつたが、特に明治43年の大洪水は記憶に残っている。この水害被害は、池ヶ谷端から北村まで途中谷久保の坂だけ残して全くの湖となり、この状態が2週間も続いた。

このため、県郡に陳情し、昭和の始めから巴川大改修工事に着手し、大正7年からようやく完了した。

しかし改修が、古庄橋で中止されたため、完全に排水することにならず、更に請願の末、耕地整理法で上流を浚渫し、昭和初年竣工し、十年一作が三年一作となったものの、新たな農地改良を行った。

昭和3年有永部落と市との交渉の結果南前の水腐地に市内の塵芥を捨てることとなりこれが終戦時まで続いた。

（資料：麻機誌）

### ③下水問題

昭和の始めまでは、肥料の主なもの人糞尿であつたので市内に生ずる之を肥桶で担いで運んだ。屎尿の値段が非常に高く、大正年代米1俵（4斗）につき29銭であつた。

化学肥料の進歩で屎尿は全くタダになり昭和6、7年頃は汲取料を取って運ぶこととなり、その内に取りに行く希望者もなくなった。市では屎尿問題が起り、下水問題が新たな問題として論じられた。

（資料：麻機誌）

#### ④教 育

学校は徳川末期には幡谷塾（後の習道舎）があり、麻機学舎及読習舎などで志ある子弟を教えていた。その後安東麻機組合村を作り安東学校に合併し明治 23 年町村制となり麻機村の確立に伴い現在の位置に麻機尋常小学校を創立した。（明治 23 年 3 月 28 日）

尚、東においては藤浪平五郎氏が戸長の要職につく以前から舎を設けて子弟の教育に当たった、織田喜作氏も平五郎氏の訓導を受けたという。

江戸末期から明治初年の頃の女兒は殆ど寺小屋へも行かず、大抵文盲であった。

7、8 才になれば子守をはじめ 12、3 才になると家事や農事の手伝いをし、15、6 才おそくも 17、8 才になれば嫁に行った。20 才を過ぎての結婚は稀にみる晩婚であった。

当時の女子の仕事は裁縫と機織りで、機織りの 1 人前とは木綿機を 1 日に 1 反仕上げる事をいった。

日清戦後ようやく小学校へ通うようになったが、これも特定の人で、全部通学するようになったのは 36 年以後になった。

男児も維新前後までは、寺小屋又は学習塾に通うのは特別の人であったが、日清戦争後、急に通学するものが多くなり、36 年以後は全部通学するようになった。

終戦後まで並んで徒歩通学したが、これは昔、通学を嫌って途中エスケープするのを防ぐため上級生が前後で監視した名残りであった。しかし、この頃、勉強は二の次の状態で専ら遊ぶことであった。当時魚や鳥が多く生息していたので、これを捕えることがならわしで、予習も復習も殆どしなかった。

## ⑤麻機小学校の歴史から

(資料：あさはた創立百周年記念誌)

肥田完彌氏 (昭和57年麻機小学校長)

明治政府の方針や施策により、五年「学制」が頒布されると、いち早く南村に読習舎、有永村に習道舎が設けられ、麻機小学校の前身が誕生しております。静機学校と改称され、北村に移転してから百年、古い歴史と伝統に輝く学校であります。

本校が当地に移って後、尋常小学校から尋常高等小学校、そして国民学校、戦後の教育改革による小学校と、幾多の混乱、苦難をのり越え充実発展してまいりました。

以下略

### ■思い出と写真で見る小学校のふりかえり

#### <明治時代>

明治時代の思い出つづる(抜粋) 明治39年入学 伊藤いままさん

・・・学校に行くにも男女着物で、修身讀本、石板、石筆を風呂敷に包み肩にかけ、藁草履をはき部落ごと1年から6年まで男女は別に並んで、道長と云って上級生が付いて通いました。男と女の運動場は別で2校舎ある中庭で、女は遊び、男は今あるセンダンの木が運動場のすみでした。・・・女は子守をしながら廊下に7・8人立っていました。・・・

写真 明治42年 尋常2年女子



#### <大正時代>

麻機尋常高等学校入学当時の思い出(抜粋) 大正9年卒業 長坂武男氏

・・・学校通いはつき紐つきの木綿の着物に三尺帯、本と石板を風呂敷に包んで肩から斜めに背負って草履履き。・・・緋の着物を着るのは紅白の饅頭が貰える三大即位の時だけだ。入学の当時上級生の女に子守をしながら登校する者が3、4人あったが、さすが2年になる頃には見られなくなった。・・・

写真 大正13年尋常高等小学校全景



大正3年尋常科卒業生



<昭和初期>

思い出（抜粋） 昭和19年度卒業 奥澤文雄氏

・・・昭和12年の7月、日中戦争が勃発し一段と戦時色の濃い時代へと移り変わってゆき、機会あるごとに教育勅語の奉読と、御真影の礼拝が行われていました。当時のクラス編成は紅組と白組で、2年までは男女共学でした。・・・昭和16年小学校は国民学校と改められ、初等科なるものが誕生しました。この年の12月太平洋戦争に突入し、・・・隣組を基礎とした班作りが行われ、高等科の生徒が班長となり、校外活動の一環といえるようなものに茶の実ひろいややまその皮（カラムシ）採りがありました。・・・

写真 昭和初期の校舎全景

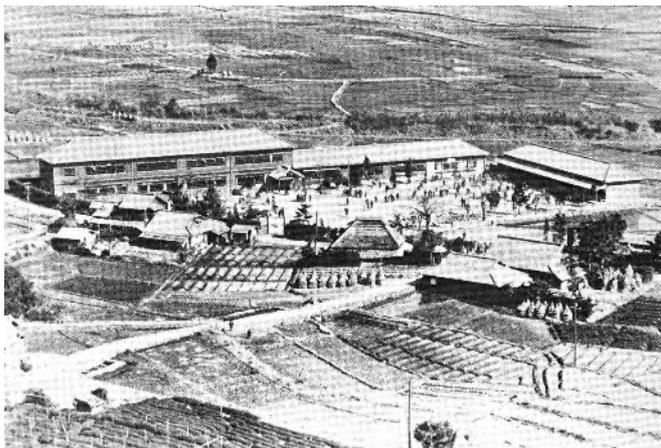


写真 昭和14年草取り

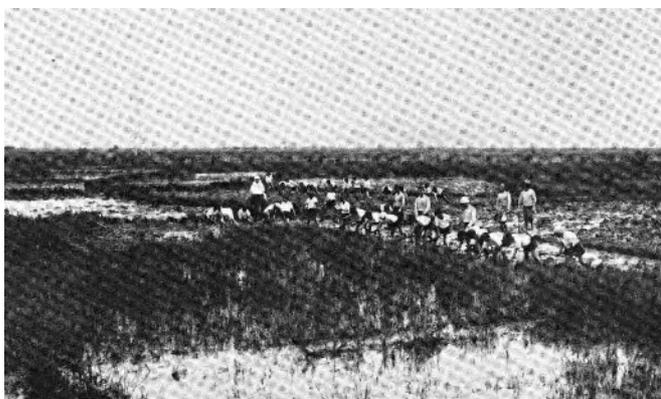


写真 昭和18年のわら草履の入学式



<昭和 戦中・戦後>

終戦前後の思い出（抜粋）

昭和25年度卒業 森 敏孝氏

・・・空襲警報が出されると部落毎に北、東は川原に、私たちは平山に避難したのですが、一番先に行って野いちごを食べるのに子ども心に楽しみの一つでありました。当時は腹一杯食べることはありませんでしたので、思い出に残ることは食べ物の事・・・昭和16年小学校は国民学校と改められ、初等科なるものが誕生しました。・・・そして、8月15日戦争は終わりました。アメリカ兵が学校にも来るようになりました。・・・そして給食が始まりました。大きな缶に粉ミルクが入っていてそれを大きな釜でとかして飲んだのですが、誰一人としておいしいと思った人はいなかったと思います。・・・

写真 昭和21年新入生



写真 昭和30年麻機小の人文字

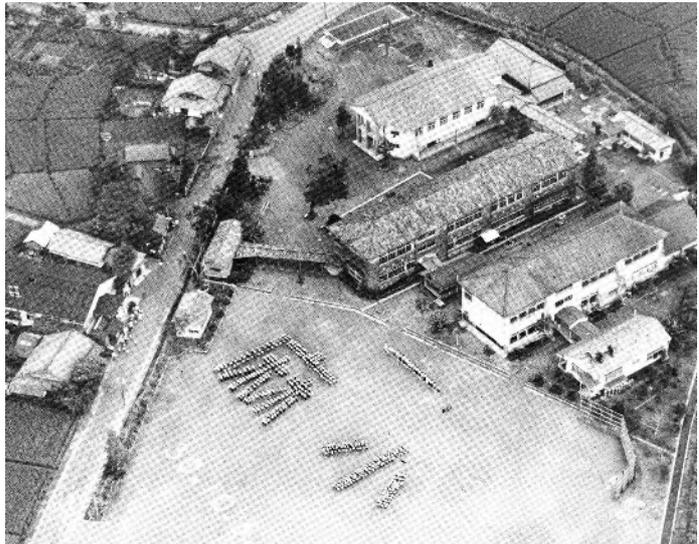


写真 昭和41年校舎鉄筋化



写真 昭和56年



## (11) 景観

### ①麻機遊水地の風景

麻機遊水池は四季折々の風景を持っている。

#### ■春の風景



市道沿いに咲く菜の花（セイヨウカラシナなど/第3工区）

#### ■夏の風景



マコモなど水生植物の緑が一層濃くなっています（第4工区）

#### ■秋の風景



夕日にオオの白い穂が鮮やかです（第4工区）

#### ■冬の風景



コシ杉塔は冬の風物詩です（第4工区）

（資料：麻機遊水池に蘇る生きものたち [パンフレット]）

## 地区の現況

地区：賤機山から麻機地区を見る



写真位置 1 賤機山から池ヶ谷地区



写真位置 1 賤機山から流通センター方面



写真位置 2 漆山方面



写真位置 2 麻機遊水地と漆山方面



写真位置 3 麻機遊水地



写真位置 4 羽高団地方面

# 地区の現況

地区：浅畑川周辺



写真位置 5 流通センター通り西側方面



写真位置 5 流通センター通り北側方面



写真位置 5 流通センター通り南側方面



写真位置 6 ゆらら北側方面



写真位置 6 ゆらら南側方面



写真位置 6 ゆらら前西側方面

## 地区の現況

地区：浅畑川周辺、巴川周辺



写真位置 6 ゆらら



写真位置 7 沼上最終処分場より南側方面



写真位置 7 西奈配水塔



写真位置 8 野丈方面



写真位置 8 漆山方面



写真位置 9 流通センター方面

# 地区の現況

地区：巴川周辺



写真位置 9 竜爪山方面



写真位置 9 漆山方面



写真位置 10 前林地区の菜の花の咲く巴川



写真位置 11 竜爪山方面



写真位置 11 漆山方面



写真位置 12 賤機山方面

# 地区の現況

地区：巴川周辺



写真位置 12 南側方面



写真位置 12 竜爪山方面



写真位置 12 賤機山方面



写真位置 13 竜爪山方面



写真位置 13 賤機山方面



写真位置 13 南側方面

# 地区の現況

地区：巴川 周辺



写真位置 14 羽高橋下流方面



写真位置 14 羽高橋上流方面



写真位置 15 北地区丘陵地から南側方面



写真位置 16 北地区丘陵地から南側方面



写真位置 17 巴川起点



写真位置 18 才光寺橋から下流

## 地区の現況

地区：赤松、東、北、諏訪



写真位置 19 賤機方面



写真位置 19 竜爪山方面



写真位置 19 浅畑丘陵地方面



写真位置 20 諏訪神社



写真位置 21 瑞雲寺



写真位置 22 浅間神社

## 地区の現況

地区：東、羽高、諏訪



写真位置 a 鳥獣供養塔や庚申塔



写真位置 b 槇の生け垣



写真位置 c 常夜灯



写真位置 d 沼のばあさんの生家

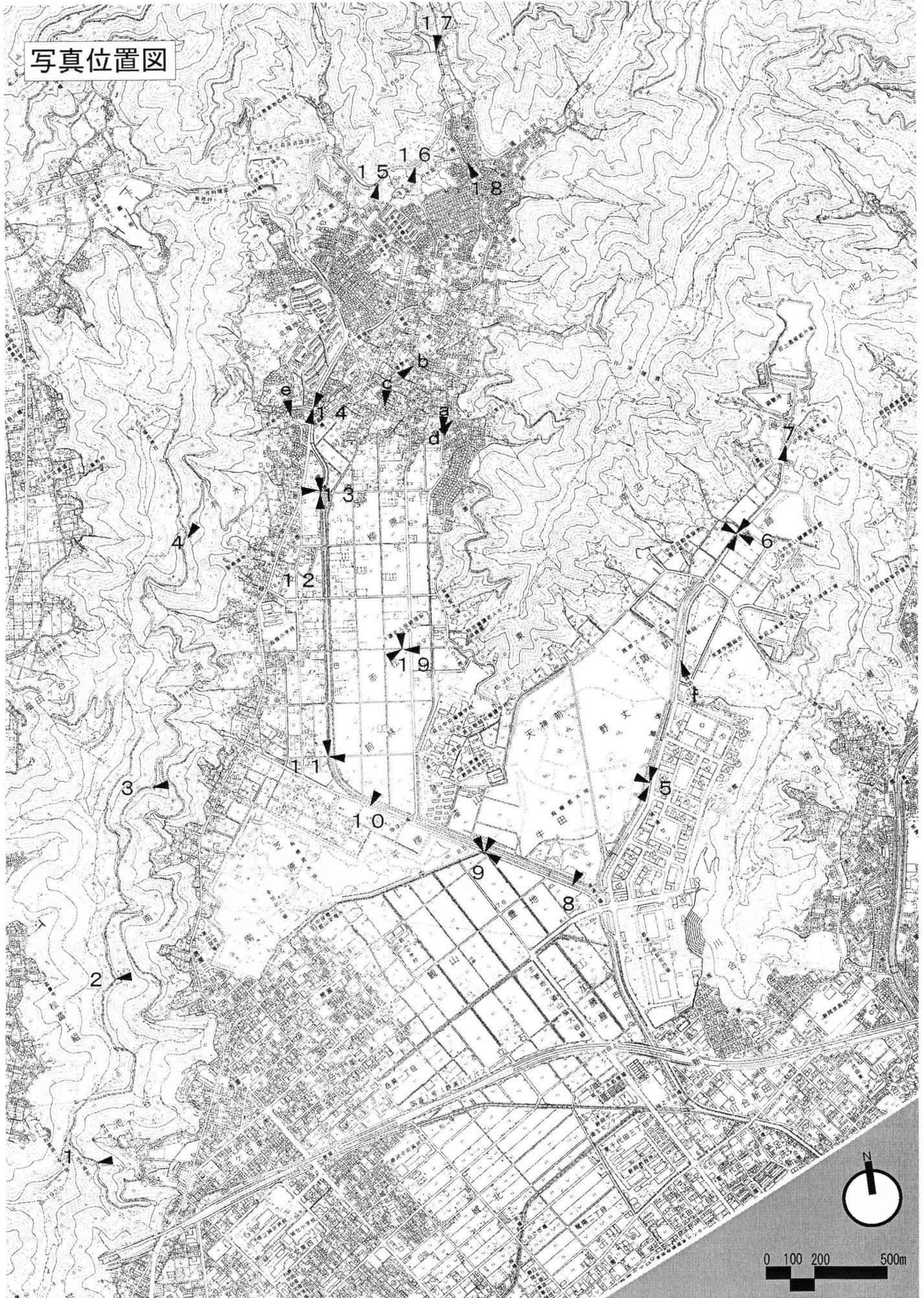


写真位置 e 森宅のこうろ種の茶樹



写真位置 f 諏訪神社の森

写真位置図



凡例



## 参考資料

- I 専門家及び地元聞き取り調査等・・・1
- II 参考資料・・・・・・・・・・・・・・6

# I 専門家及び地元聞き取り調査等

## 1 専門家の聞き取り

### 1) 地形・地質について

静岡大学 土隆一名誉教授に聞く

日 時 平成18年1月19日(木) 午後1時～午後2時

場 所 土研究室

内 容 地形・地質については、調査内容が記念誌 大谷川放水路に記述している内容を紹介しているので問題はない。

追加、資料として、最近、麻機遊水地第4工区でボーリング調査を行った時に、貝が出土したので、そのことについてレポートするので、それを調査資料に加えたらよい。

貝の出土によって、第4工区のボーリング地点は、古麻機湾にあり、そこでは、貝の生息環境にあったことが明確になった。

### 2) 歴史・民俗学について

静岡産業大学 中村羊一郎教授に聞く

日 時 平成18年1月19日(木) 午後1時～午後2時

場 所 中村先生自宅

内 容 麻機地区の民俗学については、私が監修している記念誌 大谷川放水路にまとめられているのでそれを参考にして、調査内容としてまとめてください。特に追加していく内容は無い。

また、静岡の文化 第71号にも「麻機沼の水のゆくえ」の表題で記述しているので、それも参考にしてください。

地元の歴史や民俗を把握している高齢者が少なくなっているため、聞き取りがしにくくなっている。

## 2 地元の聞き取り調査

### 1) 麻機地区の歴史・風土について

麻機村塾の会員に聞く

日 時 平成18年1月22日(日) 午後1時～午後3時45分

場 所 羽高公会堂

内 容 別紙のとおり(次頁)

### 2) 麻機地区の行事・料理について

麻機農協北支店の主婦に聞く

日 時 平成18年3月5日(日) 午後11時40分～午後12時20分

場 所 麻機農協北支店 じまん市

内 容 別紙のとおり

## ① 地元聞き取り

### 「麻機地区の歴史・風土について」

場 所 羽高公会堂  
日 時 平成18年1月22日（日）  
午後1時から午後3時45分  
参加者 麻機村塾のメンバー8名  
聞き手 静岡土木事務所 津島主任  
(有) 都市環境デザイン研究所（木村、竹内、高岡）

#### 資料について

- ・ 村塾の持っている30枚のパネル
- ・ 「教えてください 麻機の歴史」のメモ
- ・ 名前の由来（10前のマップ）
- ・ 農具・民具など資料集め（小学校などに置いてある）
- ・ 「苧麻（チョマ）」という草（福島県昭和村）
- ・ 埋蔵文化財の資料（県立図書館）

#### 聞き取りの様子



#### 瀬本さんの説明



#### ● 苧麻（ちょま）

森健→健さんは子供の頃、昭和20年前後、配給で。苧麻の上下の服を着たことがある。

写真も撮った。おばさんが現物をどこかにしまっていないだろうか。

- ・ 鳥を獲る網も苧麻で作った。街に苧麻の糸を買いに行つて、それで編んだ。
- ・ 麻機で麻を織った資料や記憶はまったくない。

#### ● 地名

- ・ 全国に麻の名の地区のネットワークがある。
- ・ 森健→何代目かの当主が書いた文書に「駿州機山羽高村」とあって、そこには麻機の地名は出てこない。  
だから麻機はそれ以降では。
- ・ 岡山→網野善彦著『「日本」とは何か』の中に、鎌倉時代の海の領主、千カマ氏の領地の中に「駿河国麻機庄」とある。元の資料は名古屋の博物館にある？  
海運水運と何かの縁があるのではないか。1200何年かの文書ではないか。
- ・ 瀬元→鎌倉期 浅服（あさはた）庄→ 江戸期 浅機 幕末に麻機 だから浅が先で麻はあとなのでは。  
麻機の範囲は変わっている。沼上が入ったり出たりしている。浅間神社の文書には沼上が入ってたりする。  
江戸時代 麻機7ヶ村といわれたが、6カ村は小島領で、麻機新田は天領だった。瀬名は庵原郡、麻機は安倍郡。  
チカマ文書には、「北村の郷」が出ていて、「郷司職を遺産としてゆずる」というのが出てくる。  
時家（北条）も出てくるので北条氏の一党だったらしい。
- ・ 森健→波止場、波止場沖というのが漆山にある。とても葦が深くて船は泊められないが、

- そこを迂回した小沼という所には海運の船が入っていたという話を聞いたことがある。
- ・有永地区には歴史的な名前が意外に残っていない。明治の地租改正のときにすっかり新しくしたようだ。
  - ・森健 東村に道部海道（どうぶかいどう）という地名がある。部落に通じる道、海に通じる道。その道はほとんどなくなっている。  
女力谷は女川では。今川の女館があつたらしい。ゆるやかだから女川という人もいる。
  - ・瀬元 らちめん にこめん という地名。  
「そうで」という地名があるが、逃げた人の田んぼを村全員で面倒を見た田んぼだという。  
肥付石は、コイ付石 コイというのは風土病。
  - ・今の池ヶ谷は口池ヶ谷。麻機が一番奥に奥池ヶ谷というのがある。麻機小学校は麻機村のちょうどその真ん中にある。
  - ・ななみさわ サクラ峠から竜爪へいく方にある。
  - ・キビ田道 黍のきびだろう
  - ・「張場」鴨を網でとる場所（古文書に記述されている）
  - ・「嫁っ子道」山向こうをつなぐ山道で、低い山に数多く存在していた。カドヤから平山間での道を「じゃんじゃく道」と呼んでいた。
- 要望
- ・岡山 時代とともに移り変わってきた麻機の暮らしが分かるようにまとめてもらいたい。  
時代と無関係に「沼のばあさん」だけで麻機が語られると、一つのイメージになってしまう。
  - ・建設省の人の講演。日本は水防の土木工事で現在の国土を作ってきたので、（オランダより干拓でできた面積が広い）ただ自然のままにという方向には疑問を感じるという話を聞いた。

② 地元聞き取り  
「麻機地区の行事・料理について」

日時 平成18年3月5日(日)  
午前11時40分～12時20分  
場所 麻機農協 北支店 じまん市  
地元主婦 森田早苗さん、杉山政江さん  
聞き手(有) 都市環境デザイン研究所(木村、竹内)

麻機地区の暮らし、「行事及び料理等について」

森田さん、杉山さんとも麻機で生まれ育ち現在も麻機で農家の主婦をされている。現在農家として、お茶、みかん、米を作っている。



① 年中行事として

お正月の雑煮は、鯉節のだし、具はさといも、だいこん、京菜、餅は四角。

注連縄は静岡市で一般的に使われているもの。

1月11日には、「田うち」をする。

「田うち」とは田を三畝くらい掘り起こし、竹(笹)に幣(しめ縄にかざる紙)をつけ、焼いた餅をおそなえする。

1月15日は小正月で餅つきをする。女性だけで行う行事は特にない。

毎月9日、お宮に集まり「お念仏」を唱える行事は今も年配の女性の間で行われている。

② 食べ物

子供の頃食べた物として、冬は集荷できないみかんを焼いて食べた。

山菜は、葉ものや芽など今よりは、いろいろな種類を食べた。

昔の人たちは、どれが食べられる物か、たくさん知っていた。

特にハスの実はおいしく生で食べた。

③ 家で作っていた調味料。

たいていの調味料は自前でつくり、味噌はどこの家でも作った。

クロ砂糖は、さとうきびを畑で作って、荷車で浜(幼いときに車に乗せてつれて行ってもらったので場所がどこだったのかわからない)に持って行って、そこで絞って作った。

④ 猟

父親も祖父も鉄砲をやり、ヤマドリ、ハト、ウヅラ、コジュケイなど撃ってきた。

おいしかったのはキジとウヅラだった。穀物をエサにする鳥は味が良かった。

シカやウサギも獲ってきた。皮を剥いで敷物や椅子にかけて使った。

趣味の狩猟だったから、家で食べたり皮を使うだけで、売り物にはしていなかった。

イノシシ猟は、10人くらいで組を作って、イノシシの通り道のあるあっちの尾根こっちの谷と持ち場を決め、自分のところにイノシシが来たらその人が撃った。

杉山さんは子供の頃イノシシ撃ちに付いて行った。

料理前には、皮を剥ぎ、肉を取り出すことは、どこの家でもできた。

⑤ レンコン

レンコンは9月くらいからの時期にはよく食べた。

煮るのが一番多かった。酢にしたり、白和えも作った。

すり身にしてハンバーグにするようなことは最近のこと。

⑥暮らし

アイロンは炭を入れたものだった。

冷蔵庫は上部に氷を入れる木製箱形の物で、毎日氷屋さんが着た。

豆腐屋さんも毎日きた。

ロバのパン屋が売りに来ていた。

## II 参考資料

本調査で参考にした資料は次のとおりである。

参考資料一覧表

分類	タイトル	著者・発行	発行年
全 般	麻機村誌	文化洞	昭和51年
	麻機誌	安本博編者 麻機誌をつくる編集委員会	昭和54年
	記念誌大谷川放水路	巴川流域総合治水対策協議会	平成11年
	「麻機遊水地に蘇る生きものたち」	静岡県静岡土木事務所	平成13年
	大谷の里	伊藤稔浩著	平成2年
	千代田誌	安本博編者 千代田誌をつくる編集委員会	昭和59年
地 学	静岡県地学のガイド	土隆一監修	平成4年
	静岡県の自然景観－その地形と地質－	土隆一著	昭和60年
	静岡市南部の地理と歴史テキスト 私たちの足元を探る	長島昭編著	平成11年
民 俗	静岡・清水平野の弥生時代	静岡市立登呂博物館	昭和63年
	あさはた 創立百周年記念誌	静岡市立麻機小学校	昭和57年
	静岡市の大字・小字名集成 江戸時代より現代まで	静岡市立図書館	昭和52年
	静岡市の地名	鈴木雄蔵	昭和56年
	しずおか町名の由来	飯塚伝太郎著 静岡新聞社発行	平成元年
	北街道と巴川	松永茂雄著	昭和60年
	巴川流域総合治水対策甲寅(2034年)への警鐘とは	伊藤稔浩著	平成2年
	季刊 清水 38 特集巴川をさかのぼる	戸田書店発行	平成17年
	静岡の文化 71号 麻機沼の水のゆくえ 中村羊一郎著	(財)静岡文化財団	平成14年
交 通	「静岡平野北部における条里型地割の復元と立地環境の変遷静岡バイパス関連の発掘調査によせて」	調査研究員 矢田 勝	平成2年
	東海道交通史の研究	静岡県地域史研究会編 清文堂	平成8年
河 川	『多自然型川づくり』への取り組み	静岡県静岡土木事務所	平成5年
自 然	麻機遊水地に蘇る生きものたち(パンフレット)	静岡県静岡土木事務所	平成13年
景 観	静岡市の巨木	静岡市緑化推進協議会	平成9年

